

バーンロムサイの25年と未来。 私たちができる支援のかたちとは

バーンロムサイが誕生してから25年。当社はその志に共感し、約20年に渡って支援を続けています。昨年10月「海外労働使合同視察」を実施し、26名の参加者が現地を訪れ、施設の見学や子どもたちとの交流を通してバーンロムサイの活動について理解を深めました。今回は、バーンロムサイのこれまでの歩みと今後めざす姿について、また、私たち高島屋が果たすべき役割について考えます。



NPO法人
バーンロムサイ
ジャパン代表
名取美和さん

バーンロムサイとは

バーンロムサイは、エイズに母子感染した孤児の施設として1999年にタイ北部のチェンマイに設立されました。当時タイではHIVやエイズが流行し、中でもチェンマイは国内で感染者が最も多く、親を亡くす子どもが大勢いました。こうした子どもたち30名を預かり、ボランティアによる施設運営が始まりました。「バーンロムサイ」とはタイ語で「ガジュマルの木の下の家」という意味。施設では今でも大きなガジュマルの木が子どもたちを見守っています。

当初は寄付とボランティアで運営されていましたが、2003年頃から寄付だけに頼らない自立運営に向けた取り組みが始まりました。現在は、現地

の素材を使った衣類・雑貨などのものづくりと、寄付により建てられたコテージを活用した宿泊業（ホシハナリゾート）の2つの事業の収益と寄付で運営されています。

バーンロムサイのものづくりは、地の少数民族の布や、肌触りのいい綿生地などを材料に施設内の縫製場で行われ、製品は鎌倉の店舗やECのほか、高島屋など日本各地のポップアップで販売されます。また、ホシハナリゾートの宿泊施設には、各国からチェンマイの大自然を楽しみにした宿泊客が訪れています。これらの事業は、施設の持続的な運営のために自分たちで収入を得るだけでなく、施設の卒園生の就労場所として個人の経済的な自立支援にも大きな役割を果たしてきました。

バーンロムサイと高島屋

バーンロムサイと高島屋の関わりは、故鈴木前会長がバーンロムサイ創設者の名取美和さんの活動に感銘を受け2005年に日本橋店8階で「第16回アジアの手仕事展」に参加いただいたことから始まりました。子どもたちの写真パネル展示、活動紹介とともに衣類や雑貨の展示販売を行って以来、各店でポップアップが行われています。また、「香典返し」の代わりに寄付をしてくださる方がいる」という美和さんの話を参考に、ギフト返礼品の代わりの「社会貢献ギフト」として現在もカタログギフトを通してお客様に提案し続けています。このように、高島屋は約20年間にわたってお客様とバーンロムサイをつないできました。

名取美和さんの長女でNPO法人バーンロムサイジャパン代表の名取美穂さんにお話を聞きました。

今後バーンロムサイがめざす姿は？

昨年、最後のHIV感染者が卒園し、バーンロムサイはHIV感染者の孤児院からさまざまな事情により親と暮らせない子どもたちの施設、普通の孤児院となりました。今、これまでの「子どもたちの命を守る」という使命から「子どもたちの未来が開ける場」に向けて新たな一歩を踏み出

しています。今後はさまざまな形で子どもたちの学びの場に発展させて、地域の子どもたちにとっても「ここに来れば未来が開ける」場所として育てていきたいと思っています。

ものづくりも宿泊業も、コロナのダメージからの回復途中ではありますが、これからも土地の手仕事や文化を伝えながら、地域に貢献し、未来をつくる活動を続けていきたいと夢見ています。

高島屋グループに期待することは？

学生時代「consumption is politics（消費は政治）」と書かれたTシャツを目にして以来、この言葉がずっと頭の片隅にありました。これは、消費者が商品やサービスを選ぶ際、その選択が社会的・倫理的、または政治的な意志表示ができるという考え方です。たとえば、環境に優しい商品を選ぶことで環境保護を支持しているというメッセージとして、消費は単なる経済活動ではなく、消費者の選択が企業や市場に影響を与えるのです。私たちの行動が社会課題に対する意識を高め、持続

可能で公正な社会の実現に向けた一歩につながるのです。

多くのアイテムを扱う高島屋では、その数だけお客様やお取引先、従業員がいます。高島屋はそれらの接点としてこの影響力を改めて認識し、プロデューサーとして場所や機会をどんどん作っていただけたら、素敵な未来につながると思います。今後も各店やグループとしての取り組みの広がりに期待しています。モノやコトを通して心地良い世の中になるよう、高島屋が持つ伝統や文化、想いを大切に、日本に根付く思いやりの心を世界に発信してほしいと思います。

当社グループは、「すべての人々が21世紀の豊かさを実感できる社会」の実現に向けたさまざまな取り組みを行っています。企業としての活動はもちろんですが、一人ひとりが社会課題への取り組みに対して理解を深め、行動につなげ、ステークホルダーに対する影響力を発揮し活動に広がりを持たせていくことこそ、私たちができる最大の支援活動だといえるのではないのでしょうか。



シンボルツリーのガジュマルの木の下で



25周年を記念して、11月下旬に日本橋高島屋S.C. 1階のガレリアでポップアップが開催されました。



滞在最終日には、子どもたちが皆で描いた絵がプレゼントされました。



施設で暮らす子どもたちとの交流も。



縫製所などの施設を見学しました。



色とりどりの絵が描かれた図書室。現在は地域のコミュニティスペースとしても活用されています



左:NPO法人バーンロムサイジャパン 遠田健太郎さん
右:バーンロムサイ創設者 名取美和さん